

またシバ群落では全く発見されなかった。

金華山島にガマズミが多いのは、サルによる種子散布によるところが大きく、このこととモミヤブナなどの林冠形成木の枯死によるギャップ形成がガマズミの生育に寄与しているものと考えた。

自由27：

屋久島の照葉樹林における果実とニホンザルとの関係

野間直彦（京都大・理・植物生態研究施設）
（＊現・生態学研究センター）

ニホンザルによる果実（特に液果）の利用の植物にとっての意味を明らかにする目的で、初夏に熟すタブノキとヤマモモを中心に研究を行った。

1) タブノキ・ヤマモモの果実数は短期間で減少した。どちらも6月上旬から熟し始め、6月下旬までではなくなった。果実を摂食し散布する量が最も多い動物はサルで、ついで鳥類であった。

2) サルは液果を未熟なうちから食べる。未熟期には、タブノキの場合、種子をおもに食べ、ほぼ全ての種子が破壊された。ヤマモモの場合は約半数の種子が破壊された。熟期になると、吐き出さか排出された種子はほとんどが健全であり、破壊された種子の平均の割合はタブノキ1.7%、ヤマモモ15.5%であった。また、秋に熟す液果では、シロダモ2.5%、ホルトノキ5.1%であった。サルによる種子破壊率は植物の種ごとに違っており、その差は果実の形態と、大きさ・硬さ・栄養・味・毒性などの種子の特性によっていると考えられる。

3) 液果が発芽能力を示す時期・果肉の有無による種子の発芽率の違いを知るために5期に分けて播種試験を行った。タブノキの種子は5月下旬に播いたものから発芽能力を示し始め、6月下旬に最高となった。すぐに発芽し、休眠性を持たない（10/27の時点で発芽していたものを判定）。種子を播いたものの方が果実を播いたものより発芽率が高く、果肉に発芽抑制作用があることが示唆された。ヤマモモは翌年の春以降発芽する。5月下旬に播いたものから発芽力を持つが、6月下旬に播いたものはほとんど発芽していない。完熟すると強い休眠力を持つことが示された（3/16時点で判定）。果肉の発芽抑制作用は弱かった。サルが吐き出したり排出した種子の発芽率は、一度に

果序全体を採って果肉を取り去った種子を播いたものに較べて、タブノキでは高く、ヤマモモでは低かった。これは、熟期には、様々な熟度の果肉がついている果序から、サルがよく熟した果実を選択して食べているためと考えられる。

液果をつける植物にとってニホンザルは、未熟期には食害者になるが、熟期（発芽力を持っている時期）には多くの種子を健全なまま散布する有効な種子散布者になっているといえる。

自由28：

下北半島におけるニホンザルとタイワンザルの接触を防止するための研究

森 治（下北野生生物研究所）
和田 久（第一田名部小学校）

1971年7月に開園された「むつ湾観光牧場」に展示動物として移入されたタイワンザルの群れ約40頭は、1975年、経営不振による閉鎖後もその跡地に飼育されていた。飼育といっても海岸線と国道にはさまれたクロマツ植林に放し飼いにされ、柵から自由に出入りできる状態にあった。

一方、下北半島頭部にはニホンザルが生息し、1970年に北限のニホンザルとして天然記念物に指定されている。この両者の生息地の距離は数十kmに過ぎないことから、タイワンザルの群れを離れたオスザルが北上し、ニホンザルと交雑する危険性が数年前から指摘されてきた。

1989年8月から9月にかけてタイワンザルのハナレザルが北上し、むつ市内で写真撮影され、県は重い腰を上げた。同年9月6日と9月19日に各1頭が森らによって捕獲され、日本モンキーセンターに移送された。

1990年4月から、これまでの情報にもとづく聞き込み調査を行いながら、電話による情報網づくりをして、タイワンザルの北上を未然に防ぐ態勢を整えた。一方、ニホンザルの群れに関しては、これまでより広範囲に、接触の可能性の高い地域に重点をおいて調査した。

同年5月、タイワンザルの所有者は飼育地を南東方向に3kmほど離れた林中に移転し、飼育地から出歩くことのないことを宣言した。しかし、以前と変らぬ放し飼いで、周辺の土地利用、植生の調査結果からハナレザルの北上、南下の可能性は何ら軽減されていないことが判明した。